

4 実験航海でわかったこと

下川：実験航海において、海王単船で漕いだ状態で船速は4ノット（時速約 7.4 km）弱という結果でしたが、長時間巡航することを考えれば、こんなスピードは維持できない。結局、台船を曳航して2ノット（時速約 3.7 km）前後が基本で、潮流とか風とか、2ノット出す力より勝った外力がかかってくると戻されてしまう。自然の力をすごく詳細に見抜いて航行していたのだらうと思います。

藤本：そうですね。

下川：我々現代人は、機械の力があるから何とでもなるように思うけれども、古墳時代の人たちは、風の力とか波の力とか潮流とかを詳細に読み取らないと、一歩間違えば目的地に着かない状況で、それでも長距離を運んでいた事実。すごい能力だと改めて感じました。それと、危険な海域などの情報をよく知っていたんでしょうね。そのことをよくわかって航海していた。

高木：水先案内人が居たんでしょうかね。

下川：そうですね。地元で詳しい人物が必要だったでしょうから。石棺を載せた台船を曳くと、船速は1ノット（時速 1.85 km）程度まで落ちたかもしれません。1ノットでは全然弱いすよね。ちょっとしたことですぐ流されてしまう。でもまあ、船のスピードに関してはそんなところでしょうか。我々のように現代船でひっ張ることはできないから、自分たちだけでどう対処していくか。海の様子を本当につぶさに見ていたと思います。

藤本：海のことを熟知した人たちが携わらないと難しいということですね。

下川：そうですね。瀬戸内海は島がたくさんあって複雑な海域ですから。あと、実験航海の結果、1日の距離は17.47 マイル（約 28.1 km）とか34.7 マイル（約 55.8 km）とか実航程が出ましたが、この辺が妥当な数字なので、やはり古墳時代当ても、1日の航続距離は20 マイル（約 32.2 km）前後と考えて良いと思います。そして、寄港地の選定について先ほど話がありましたが、大体その距離感で関係する古墳や港があったということでした。

藤本：20 マイルと言いますと、30 kmあまりですね。

高木：航海した時期というのは、海が比較的穏やかな5月から8月くらいでしょうか。大体その時期以外は、波が荒いんですよ。

下川：冬場は特に。また、台風の時期は避けるでしょう。

藤本：一番運び易いのが、5月から8月ということですね。

高木：でも実際は、大阪湾などに船で着いた後も、川や陸上を運搬して古墳まで運ぶんですよ。例えば、滋賀県野洲市の石棺（円山古墳・甲山古墳）などは、淀川を遡るのかわかりませんが、これも大変だったのではないのでしょうか。奈良盆地もそうで、植山古墳などは山の中ですよ。

藤本：確かにそうですね。結構陸送しないといけないですね。

高木：おそらく、大阪の藤井寺市の古墳とかだと、川はそう遡れないので、どうしても淀川から上って陸送しないと難しい。

下川：これだけ重たい石棺をひっ張っていける能力があるとなると、石棺以外にも、色々と人やモノを運んでいた可能性がありますよね。

【対談】“古代と海への挑戦”を振り返る（大王のひつぎ実験航海 20 周年記念）

高木：石棺を運ぶというのはごく一部の、特殊な出来事ですからね。人を運ぶだけなら結構な人数を運べたはずです。

下川：そう、色々な所にね。地域の首長を畿内に連れていくなんて事もあったかもしれないですね。

高木：漕ぎ手以外にも、石棺を送る方の豪族からも誰か全権大使みたいな人が随行したと思うんですよ。運び屋さんにただ任せるという感覚ではないと思うので。特に相手が大王ともなれば、それなりの人がついて行って「お届けしました」ということで、セレモニーもあったんじゃないかと考えています。そういう意味で、石棺を運ぶだけでなく、それ以外の人間も含めて船団全体がどの位の規模だったのかは気になるところです。

藤本：何隻か一緒について行ったでしょうね。

高木：昔、京都大学の小林行雄先生から「有明海や東シナ海には石棺がいっぱい沈んでいるからね」と言われました。確かにあり得ますよ。特に、有明海から東シナ海に出た所とか、玄界灘沿岸とか。

下川：波が急に立ってきますからね。

藤本：運ぶのに失敗して沈んだ石棺も、おそらくあるでしょうね。そのうち見つかるかもしれませんね。

高木：台風もあってギリギリではあったけど、結局、台風がそれてくれて、大阪には難なく着いたんですよね。

下川：そうですね。

高木：あの時、芦屋から大阪南港は僕が寄港地の担当だったんですよ。受け入れる側の大阪南港にも、何人か担当の方がいらっしゃったんですけど、やはり僕も行かないといけないということで。